

第6学年1組 国語科学習指導案

指導者 溝上 剛道

1 単元名 作品の“愉しみ方”を広げよう（「海の命」光村図書6年）

子どもたちは、これまでの学習で「心情の変化」「相互関係」「人物像」「物語の全体像」「表現の効果」など、さまざまな視点で物語を愉しんできている。特に前単元「やまなし」では、表現の効果等に注目しながら、解釈を深めていく姿が見られた。しかし、その解釈を「考えの形成」につなげていく点には課題が残った。

そのような子どもたちに、本単元では「海の命」と出合わせ、既習事項を総動員しながら自分の考えを形成・深化していく力の育成をねらう。そして、本単元で広げた作品の“愉しみ方”を日常の読書生活に生かし、さらにその“愉しみ方”を広げ深めながら言葉がもつよさを味わっていきけるような「自律的な言葉の学び手」になってほしいと願う。

そこで、本単元では、より日常の読書生活に近い形で「学びの文脈の生起」を実現できるようにしたい。そのために、初発の感想を「自分がどう作品を愉しんだか」「これからどう愉しみたいか」を視点に書くとともに、感想交流の中で「何を」「どんな活動で」愉しんでいきたいかを自己選択・自己決定させていく。自らが選択した活動に取り組み、「作品の“愉しみ方”を広げ深められたか」を振り返っていくことで、言葉への自覚を高めていくとともに、自ら活動への取り組み方を調整しながら、自律共創する学びを生み出していく。

2 単元について

- (1) 本単元では、「海の命」を学習材として取り上げる。登場人物の心情の変化や人物像、物語の全体像に対する意見や感想を共有し、自分の考えを広げる力の育成をねらう。

学習材「海の命」は、さまざまな視点から愉しむことができる作品である。作品の空所や暗示的な表現が多く、心情の変化や表現の効果（意図）について多くの問いが生じてくる。それを自分なりに解釈したり、他者との対話を通して考えを広げ深めたりしていくことが愉しい作品だと言える。また、描写は少ないものの、おとうや与吉じいさの人物像を象徴するような言動が散りばめられており、それらが太一にどう影響を与えたのか（相互関係）について考えるのもまた面白い。さらに、それらを関連付け、物語の全体像について自分なりの考えをまとめていくことも愉しさの一つと言えるだろう。そのような愉しさを、対話を通して広げ深めながら、自分なりの考えを形成・深化していけるような単元を構想する。
- (2) 1学期は「帰り道」を学習材に、視点の違いに着目して相互関係や心情の変化、人物像を捉える学習、2学期は「やまなし」を学習材に、作品世界を捉え自分の考えをまとめる学習に取り組んだ。本単元では「海の命」を学習材に、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる学習に取り組む。この学習は、中学校において、場面と場面、場面と描写などを結び付けて解釈し、自分の考えを確かなものにする学習へとつながっていく。
- (3) 本単元に関する子どもの実態は、次の通りである。（調査人数：36人）
 - ① 情景描写や比喻表現などの暗示的な表現や象徴的な表現に着目し、作品の全体像を具体的に想像しながら自分の考えをまとめることが難しい子どもが5名いる。
 - ② 相手の発言を受けて話をつなぐことに苦手意識がある子どもが5名、話合いを通して自分の考えを広げることに時間を要する子どもが8名いる。
- (4) 指導にあたっての留意点は、次の通りである。
 - ① 単元の導入では、『教科書の本総選挙～高学年編～』を行い、アンケート結果を基に交流の場を設けて、既習事項を想起できるようにする。その上で、「初読段階で感じた作品の面白さ」

「作品をより愉しめそうなところ」を視点として初発の感想を書くようにする。

- ③ 拡大教材文やロイロノート等を活用しながら、各自がどの言葉に着目し、何を追究したいと考えているかを共有していく場を、単元を通して設定していく。その中で、「誰と」考えたかについて自己選択させたり、問いや困りごとに応じてグループの再編成を促したりしていくことで、一人一人が目的意識をもって他者にかかわっていくことができるようにする。
- ④ 「作品をより愉しむことができたかとその理由」「次は『何を』『誰と』『活動にどう取り組んで』作品の愉しみ方を広げ深めていきたいか」を視点として振り返る場を設定する。その記述や作りかけの成果物から「考えの形成・共有」に関わる思考過程を見取って価値づけ、単元を通して評価基準を具体化していく。
- ⑤ 本時は、第一次の2時間目である。前時に書いた感想を交流する中で、「何を」「誰と」「どんな活動で」愉しみたいかについて検討し、選択・決定していく場を設けることで、自分がどのように作品の“愉しみ方”を追究していきたいかについて、見通しをもてるようにする。

3 単元の目標

- (1) 語句と語句との関係、語感や言葉の使い方に対する感覚を意識して、語や語句を使うことができる。
- (2) 文章を読んで捉えた心情の変化や相互関係、人物像、物語の全体像などに基づいて自分の意見や感想をまとめ、それらを共有して考えを広げることができる。
- (3) 言葉がもつよさを認識するとともに、「いのちシリーズ」の並行読書に進んで取り組み、国語の大切さを自覚して思いや考えを伝え合おうとする。

4 指導計画（8時間取り扱い）

学習活動	主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援	時間
1 初発の感想を交流し、単元の見通しをもつ。	○『教科書の本総選挙』を行い、自分たちがどんな視点や考え方で物語を愉しんできたかを想起できるようにする。 ○「何を」「誰と」「どんな活動」で考えたいかを検討する場を設定し、自分の考えをまとめたり広げたりしていく見通しをもてるようにする。	本時 <u>2</u> 2
2 「何を」「誰と」「どんな活動」で考えるかを選択し、作品の“愉しみ方”を追究する。	○ 基本的に自分で相手を選んで話し合いながら、一人一人が自己決定した言語活動に取り組ませていく。自分たちで小グループを作って活動に取り組む際には、そのグループで何に取り組んでいるのかをホワイトボードに書かせ、他の子どもたちからも見えるようにしておく。また、ロイロノートを活用して振り返りや各自が取り組んでいる言語活動の途中経過を共有し、互いに見合えるようにしておく。 ○ 活動に取り組む中で、小グループを行き来しながら何かを明らかにしようとしている姿や、問いの解決に行き詰まっている姿を見取る。その中から考えの違いや困りごとを取り上げて小グループの再編成を促したり、子どもたちの必要感に応じて全体で話し合う場を設けたりする。	5
3 単元の学習を振り返る。	○「いのちシリーズ」から1作品を選んで自分の考えをまとめ、交流する活動に取り組ませ、考えの形成・共有に関する資質・能力の伸びを実感できるようにする。	1

5 本時の学習

(1) 目標

「何を」「誰と」「どんな活動を通して」考えることで作品をより愉しめるかを検討することを通して、文章に対する自分の考えをまとめたり広げたりしていく見通しをもつことができる。

(2) 展開

時間	学習活動	子どもの思い・姿
5	1 自分や友達の初発の感想を読み、本時の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ これから、もっとこの作品を愉しむためには、どんなふうに学習を進めていけばいいかな。 ・ 僕は太一がなぜ瀬の主をうたなかつたのかを考えたらもっとこの作品を愉しめると思う。 ・ 同じことを考えたい人と一緒に話し合っていきたいな。誰か近い考えの人はいるかな。
3 5	<p>2 「何」を考えることで作品をより愉しめるかを検討する。</p> <p>(1) グループで話し合う。</p> <p>(2) 全体で共有する。</p> <p>(3) 相手を選択して話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私は、「海に帰る」という表現が気になったんだよね。 ・ なんでそこが気になったの。 ・ これって与吉じいさが死んだってことでしょ。それをあえて「海に帰る」って書かれているのがなんでかなって思う。 ・ 確かにあえての表現って考えていったら面白そうだね。他の人たちは、どんなことを考えているんだろう。 ・ 他にも考えたらもっと愉しめそうなことはあるかな。 ・ 僕は「おとう、ここにおられたのですか。」の意味がわからないので、そこを考えたいです。 ・ 私も似ていて、「こう思うことによって…」と書かれているから、太一は本当はどうしたかつたのかがわからなくて、それを考えると面白そうだと思います。 ・ 僕は、与吉じいさの「千びきに一びきでいいんだ。」という言葉が気になっています。 ・ さっき、与吉じいさの言葉が気になっているって言っていたでしょ。どういうこと？ ・ タイとかを二十匹とっているのに、「千びきに一びきでいい」って意味が分からなくない？ ・ 確かに。でも、それってたとえなんじゃない？ ・ だったら、与吉じいさが何を言いたいのかを考えると面白そうだね。 ・ それを考えるのに合う活動って何だろう。
5	4 本時の学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 私は、太一の心情の変化を視点にして愉しみたいから、『太一のモノログ』を作りたいです。 ・ 私はいろんな言葉の意味を考えたいから「やまなし」の時のように解説文に取り組みたいです。



子どもたちは、単元びらきで「海の命」と出会い、一人一人が初発の感想を書いています。本時では、その感想を交流し、既習の指導事項やこれまで取り組んだ言語活動を想起しながら、一人一人が「何を」「誰と」「どんな活動で」読んでいくとより作品を愉しめそうかについて考えていきます。

主体的・対話的で深い学びを生み出すための教師の支援（発問・指示，教材・教具，評価）

- はじめに、本時では単元の学習計画を立てていくことを知らせる。初読段階での自分の“作品の愉しみ方”を広げていくためには、これからどのように学習を進めていけばよいかを問う。
- 「他の人と話し合う」等の発言に対して、「何を話し合いたいか」「誰と話し合いたいか」を問い、次の課題を設定して、感想交流の目的意識をもたせる。

「海の命」の「何を」「だれと」考えると、作品をより愉しめるだろう。

- まず、グループでの感想交流の場を設け、どの叙述に着目し、何を考えていきたいと思っているかを出し合わせる。
- グループ内で整理ができたところから、黒板上の拡大教材文に付箋を貼らせていく。3グループ程度が貼り終えたところで、全体共有の場を設ける。
- 全体では、まず付箋紙を貼っている子どもに発言を促し、「何を」に当たる言葉とともに、「なぜそれを考えたいと思っているか」も板書していく。
- 第5場面の太一の行動の理由や心情の変化、第3場面の与吉じいさの言動やその意味には、多くの子どもたちの関心が集まると予想される。それらを取り上げながら、関連する付箋を出していくよう指示し、「だれと考えたいか」の見通しがもてるようにする。
- 主に上記の場面について取り上げたところで、相手を選択して話し合うように促す。興味に近い友達と話すことで「何」をより明確にしたり、自分とは違う着眼点をもっている友達と話すことで「何」を広げたりできるようにする。
- 小グループができていくところを取り上げ、「何を」考えたいグループなのかを確認する。その上で、それを考えるにはどんな活動が合うかを問い、これまで取り組んできた言語活動を想起させた上で、第2の課題を設定する。

【教材・教具】

- 付箋
- 拡大教材文
(板書用・グループ用)
- タブレット端末
(ロイロノート「提出箱」の初発の感想)

【教材・教具】

- これまで取り組んだ言語活動の一覧

自分の考えたい「何」には「どんな活動」がぴったりだろう。

- 「～を考えたいから、○○の活動がいい」のように、自分が考えたいことと言語活動を結びつけている姿を価値づけることで、「何」をより明確にできるようにする。
- 活動の例として、これまで取り組んだことのある言語活動を「海の命」版にしたものを示す。必要に応じて言語活動の成果物を見返したり、例示した言語活動のフォーマットを見たりできるようにしておく。
- 「①何を」「②誰と」「③どんな活動で」を視点として、自分がこれから“作品の愉しみ方”を広げるためにどのように学習を進めていきたいと思ったかを振り返らせる。

【評価】

「何を」「誰と」「どんな活動で」を視点として、自分の考えをまとめたり広げたりしていく見通しをもつことができる。
(振り返りの記述内容)